

## 地域づくりを担う 公民館活動の現状とこれから

愛媛大学名誉教授 讃岐 幸治



### 影の薄い公民館

公民館がどこにあるのか、その所在地すら知らない、そんな人が多い。ましてや公民館を利用して人はいない。ましてや、主として高齢者や女性など、ごく一部の人間に限り、壮年男子や子どもたちの利用はほとんどない。

公民館という名称を使っているが、都市部にあつては、もっぱら趣味・教養・スポーツなどに関する学級・講座を行うだけの、民間のカルチャーセンターとなら変わらないもの。農山村地域、なかでも過疎地域にあつては、いわゆる生活センター的なもの。さらには「単なる利用施設」貸し館として、コミュニティ・センターと何ら変わらない公民館など、いろいろな使われ方をしている。

公民館は何をするところか。公民館は何のためにあるのか、その必要性がぼやけしまい、いまでは行政のみならず、地域住民の側からさえ公民館軽視論、公民館不要論が起こっている。ここ4、5年間で全国で約千館の公民館が減少、減少した公民館のうち、約8割はコミュニティ・センター等に

転用されている。

### 地域社会の衰退と地域力の醸成

地域社会をみると、オレオレ詐欺、孤独死、ゴミ処理や河川の汚濁、地域の伝統的な祭りの衰退など、いろいろな課題が噴出している。かつては、これらの課題は行政の仕事として行政に任せておけばよかったが、いまはそ

うはいかない。どの自治体も財政不足で、行政にはそれに取り組むだけの余裕がなくなっている。また、住民のニーズが多様化してきたことで、行政の画一的な対応ではなく、それぞれの地域の実情・実態にそくした、その地域ならではの対応が必要になってくる。そういうこともあつて、行政のみでは対応できなく

なっている。

今日にあつては、地域の課題を解決していくためには、行政だけでなく、地域の住民、団体、NPOなどが、それぞれ自主的に、持ち味を発揮し、互いに協働し取り組んでいかざるをえなくなった。いわゆる「地域力」、「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」を高めていくことが必要になってきた



桜井 ふくしまキッズとの絆

のである。

2008年に、総務省は地域の課題解決に取り組む「地域力」を高めるために、省庁横断的な組織として、「地域力創造本部」を設置した。また国土交通省も同年、住民の生活課題や地域課題の解決のためには、地域の住民や団体、学校などが、地域への思いを共有しながら、「新しい公共」の担い手として、主体的に、継続的に参加・協働していくことの必要性を提言している。

こうした流れにみるように、どの自治体・地域にしても、地域課題を解決するため



川之石 福島キッズとの交流事業

や、地域の活性化のためには、いかにして「地域力の醸成をはかるか」や「新しい公共の担い手をつくるか」が、最も重要な課題となってきたのである。

### 地域づくり活動の拠点として設置された公民館

ところで、「地域力の醸成」とか、「ソーシャル・キャピタルの形成」とか、それは、どこがその役を担うべきか。それは、まさに公民館が本来的に担うべきものと期待されていた。公民館は、そのために設置されたものだったといっている。

たとえば、昭和21年に出された「公民館の設置運営について」をみると、公民館は、「住民の生活課題、地域社会の共通課題、・・・その解決を教育的手段によつて住民自らの手で解決できるよう」にするところである。つまり公民館は、住民自らの手で生活課題や地域課題を解決していく力、「自治能力」を育成する拠点として設置されたものだったのである。

また、公民館という呼び名からしてそうだが、公民館を構想し設置した寺中作雄によれば、「公民館でいう『公民』とは、自己の人間としての価値を重んずるとともに、一身の利害を超越して、相互の助け合いによつて公共社会の完成のために尽くすような人格を持った人、またはそのような人格たら



大川 鯉のぼりづくり

んことを求めて努力する人の意味である」と。「公共の担い手」づくりをめざしてつくられたものだったのである。

さらに全国公民館連合会は、「公民館のあるべき姿と今日的指標（昭和42年）」において、「地域社会における課題をいかに総合的に取り組むか」、そのために「公民館は、諸団体・諸機関の連携と調整をはかり、住民の組織的な教育活動を通じて正しく力ある世論をもちあげ、地域社会発展の原動力となるべきである。これが公民館の究極の役



生石 3世代交流もち米づくり

割である」と。  
 このように公民館は、地域づくり活動の拠点として、地域力の醸成、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の育成、公共の担い手づくりの場として構想され、設置されたものであった。

## これからの公民館活動の方向

どの自治体、地域にあっても、地域の底力、ソーシャル・キャピタルの育成が必要とされるいま、公民館は、その本来の使命に立ち返り、地域づくり活動の拠点として

の機能を強めていくときだといえる。

公民館のもつ「集める」「学ぶ」「結ぶ」の機能を活かして、公民館は地域力を醸成していくときである。「集める」機能を通して「われわれ感情」を培い、「学ぶ」機能を通して地域課題解決への意識を

高め、「結ぶ」機能を通して人びとや機関などの間のネットワークを図り、地域の課題は自ら主体的にかつ協働して解決していくという地域の底力を高めていくことである。

ただし、昔と異なり現在の社会状況は複雑化しており、つぎのような方向をめざす必要がある。

一つには、公民館は、自治会など地縁を基盤とする共同体、「地縁コミュニティ」だけでなく、地域外のNPO、企業などの「テーマ・コミュニティ」とのつながりを深めていく必要がある。特に今後は学校との連携協働を図っていく必要がある。

二つには、公共の担い手づくりという時、



双海 スター☆ドームづくり

かつては自己を犠牲にして公（地域）のために尽くすという「滅私奉公」の意味合いが強かったが、これからはそれぞれの持ち味・特技などを生かしながら地域（公共社会）を創造していく。言うなれば「活私創公」の方向に向かう必要がある。

三つには、豆腐は、色も形も大きさもそれぞれ違う大豆をすりつぶして、一つの枠に入れてつくったものである。それに対して納豆は大豆の色や形や大きさを活かしたままにしてつくられている。これからは「豆腐型社会」でなく「納豆型社会」をめざすべきであろう。

公民館は、地域づくり活動の拠点として新たな段階に入っていると見えよう。